

V-1

桜美林短大・大学・大学院
校舎・施設の変遷

短大創設期の頃の校舎——桜美林学園草創期の木造校舎

創立者 清水安三が、初めて町田（当時、忠生村）の地を踏んだのは、1946年3月24日で、日本に引き揚げて、わずか5日後のことであった。日本に帰った安三は、農村に学校と教会を建てたいという希望を持っていた。帰国後、東京に向かった折に、後に本学園初代理事長を務める賀川豊彦を介して、敗戦後未使用となっていた、旧相模陸軍造兵廠の寄宿舍跡を紹介された。この施設は、第二次大戦中に片倉組が建設し、陸軍に貸し出していたものである。

敗戦後の物資難の中で、施設から持ち出せるものは持ち出され、窓枠も戸も、机も黒板もない状態であったが、安三は、ここに新たな学園を設置することを決意した。必要な什器は、入学式前日によく揃ったとされる。当時は、桜の林の中に校舎が立っているようであったという。1946年5月29日に高等女学校の設置が認可され、50年4月には短大が設置された。なお、この場所は現在、桜グラウンドなどになっている。



■ 桜美林学園玄関（1952年）
中学・高校・短大の看板が見える。現在の桜寮付近にあたる。



■ 畑地の中の旧校舎（1940年代後半）
開校当時、周囲には畑が広がっていた。手前の道路は、町田街道。



■ 旧校舎の宿舎（1953-56年）
木造2階建ての宿舎で、布団を干している様子がわかる。



■ 木造の旧校舎（1953-56年）
木造2階建ての5棟の教室・宿舎からなっていた。



■ 旧校舎から富士三山を望む（1953-56年）
校舎から富士山の頂を望むことができ、右奥に白い頭頂部が見える。



■ 壁が落ちた校舎（1950年頃）
当初の校舎は、壁が落ち、窓は破れており、安三は「オンボロ校舎」と呼んでいた。



■ 復活の丘（1953-56年）
畑だった様子がわかる。奥の林は、矢部八幡、その手前に校舎が見える。

V-1

桜美林短大・大学・大学院
校舎・施設の変遷

短大創設期の頃の校舎——復活の丘への校舎建設

開校10年を迎えた1956年、校地拡張のため、「復活の丘」と呼んでいた町田街道の対面に広がる丘陵地を買収した。用地購入に当たっては、米軍厚木基地のチャブレン、サレンバーガー氏の寄付金によるところが大きく、サレンバーガー・ランドと名付けられた。また、造成作業には、米軍相模総合補給廠からブルドーザーが貸与された。

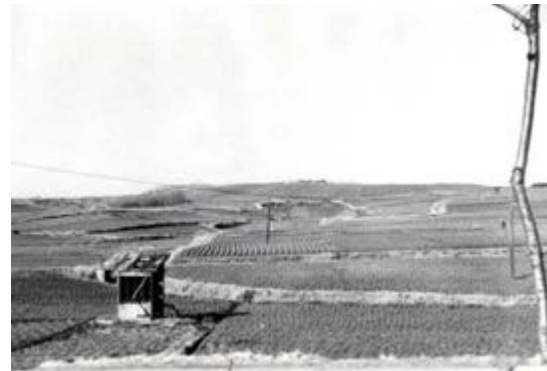
1957年には、「復活の丘」に初の鉄筋コンクリート校舎の建設に着手し、中高、短大の校舎や図書館などの施設を次々と建設していった。校舎の建設資金は、私学振興会からの貸与のほか、募金活動や学園債の発行によりまかない、建築設計は、安三の故郷 近江と所縁のある一粒社ヴォーリス建築事務所東京支店に依頼した。

1958年に初の新校舎として明々館第1期工事が竣工、翌59年には新チャペルとして荊冠堂が竣工した。新しい建物の名称には、論語から得たものが多く使われた。一方で、1958年3月8日の卒業式の最中に、旧校舎で火災が発生し、木造校舎の一部を焼失している。



■ 清水夫妻と復活の丘（1953-56年）

復活の丘を背景に撮影。右端に清水夫妻が立つ。



■ 復活の丘（1946年頃）

町田街道側から見た復活の丘。手前に水田、奥に麦畑が広がる。



■ 米軍貸与のブルドーザー（1956年8月1日）

校舎建設地の造成にあたり、相模原の米軍基地からブルドーザーが貸与された。



■ 明々館第2期工事中の様子（1960年3月）

明々館の第1期工事は1958年、第2期工事は60年、荊冠堂は59年に竣工した。



■ 初代の荊冠堂の内部（1960年頃）

荊冠堂（チャペル）での礼拝の様子。



■ 旧校舎の火災（1958年3月8日）

卒業式の最中、厨房室から出火し、校舎の一部を焼失した。



■ 桜美林学園絵葉書の航空写真（1964年）

右下に、木造の旧校舎が見える。左上に鉄筋コンクリートの新校舎群が見える。

V-1

桜美林短大・大学・大学院
校舎・施設の変遷

発展期の短大・大学——短大校舎の整備

安三の回想録によれば、短大創立当時、「こんなオンボロの校舎では、写真を撮ってクニへ送ることができない」と言って、たった一日しか在学せずに帰郷してしまった女学生がいたという。しかし、「復活の丘」に校舎がずらりと建っている夢を抱いていた安三は、学園関係者や保護者等の寄附に対する理解を深めつつ、その夢を次第に実現させていった。

1962年3月に短大校舎として亦説館（第1期）が竣工し、同年9月には短大女子寮として崇貞寮（現 崇貞館付近）が竣工した。翌1963年3月には、亦説館第2期工事が竣工し学而館と命名され、67年には短大家政科の専用校舎として真珠館と、短大女子寮としてアロハ寮（87年解体、現 徳望館付近）が竣工した。その後、1972年に短大研究棟として図書館脇に提撕館（2006年解体）が、83年には短大校舎として語学センターを併設したLL館（現 サレンバーガー館）と、旧校舎跡地に新たな校寮が竣工した。



■ 第7期新校舎工事（1964年）
第7期工事として、学而館の第2期工事が行われた。学而館は2006年解体。



■ 桜美林学園絵葉書（1964年）
町田街道から眺めた新校舎。中央の塔はチャペル。手前に水田が見える。



■ 崇貞寮近景（1962年）
清水安三は、この寮を「一流ホテル見たいである」と語っている。2000年に解体、02年に崇貞館を建設。



■ 亦説館竣工（1962年3月）
第4期工事として、3階建て短大校舎の亦説館が1962年に竣工。2022年解体。

■ 崇貞寮遠景（1962年）
短大女子寮（定員88名）として、3階建ての寮が1962年9月に竣工。手前には水田が広がる。



■ 短大校舎の真珠館と学生（1967年）
短大家政科校舎として、4階建ての真珠館が1967年に竣工。2006年解体。



■ 新装された校寮（1983年）
木造の旧校寮を取り壊し、4階建ての新たな女子寮となった。



■ 短大校舎のLL館（1984年4月18日）
4階建てで、語学センターを設置し、LL教室、視聴覚教室などが併設された。

V-1

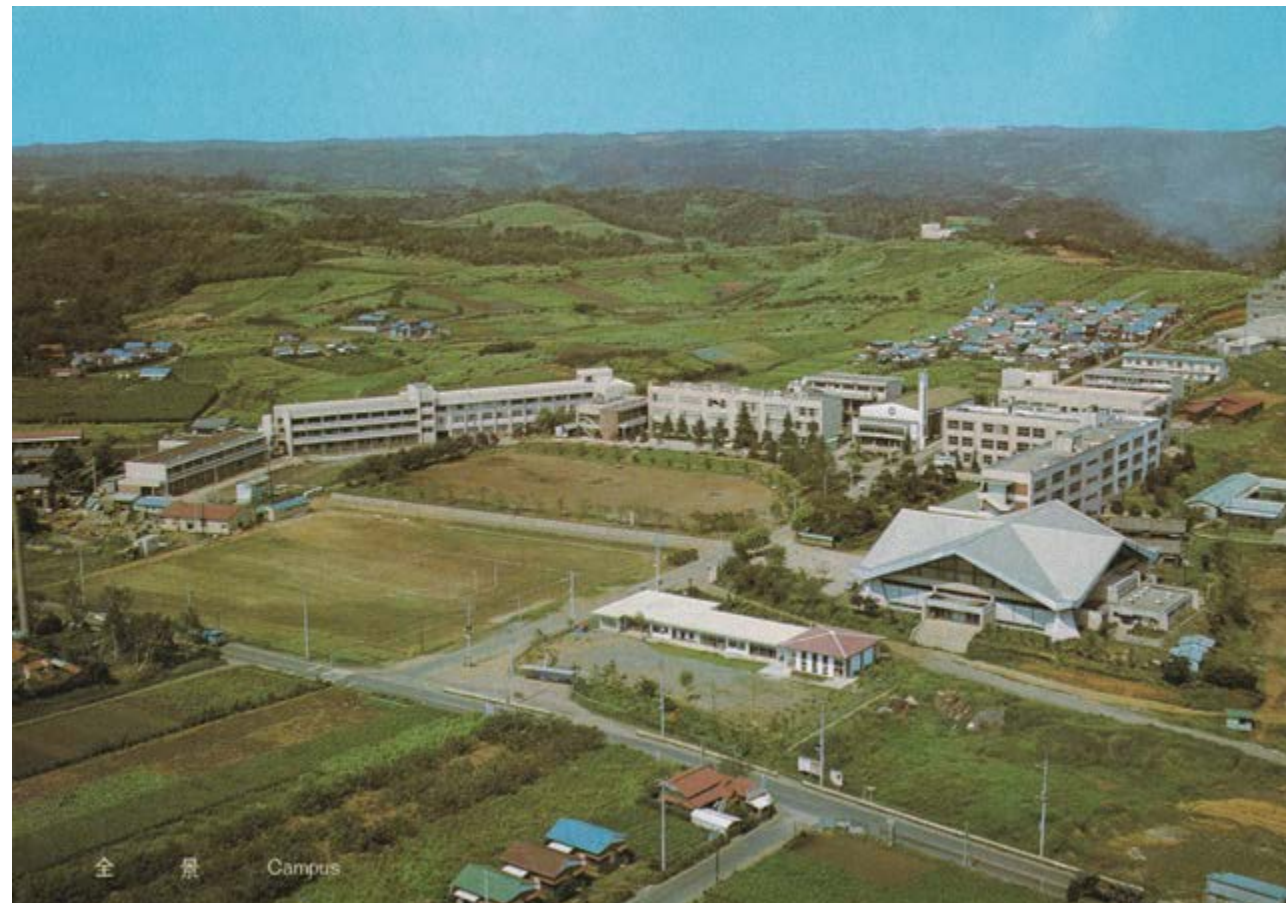
桜美林短大・大学・大学院
校舎・施設の変遷

発展期の短大・大学——大学施設の整備

1960年代は、4年制大学の設立を中心に学園の拡大が図られた時期で、学園広報誌も活用し、学園関係者や保護者等に向けて教育事業の拡充に対する理解を求めるなど、学園の総力を挙げて大学の設置準備に力が注がれた。

1966年の大学設置に当たり清水安三は、未来の大聖堂、研究室、大教室を具えた校舎などの建設構想を心に思い描いていた。大学設置に向けて1965年6月には、大学用の図書館・教員研究棟として亦説館第4期工事が竣工し、時習館（2006年解体）と命名された。同年10月に学生食堂として文哉館が、同年12月に大学女子寮として太平荘（現 太平館付近）が竣工した。

大聖堂の建設には至らなかったものの、その後も1972年に大教室棟として以德館、大学教員研究棟として其中館（2022年解体）が、75年には大教室棟として待望館、77年に学生会館として清友館、79年に大学教員研究棟として碩学会館が竣工し、1970年代も桜美林は、大学施設の建設ラッシュが続いた。その後、1989年に国際学部が新設され、徳望館が竣工した。



■ 桜美林学園絵葉書（1969年）

大学開学4年目の学園。周囲は畑が目立つが、学園の白い校舎が立ち並ぶ。



■ 時習（じしゅう）館（1965年）

3階建てで、大学用の図書館・教員研究棟として1965年3月に竣工。2006年に解体。



■ 学生寮の太平荘（1965年12月）

2階建てで、大学女子寮として1965年12月に竣工。1992年に解体され、その後、太平館が建設された。



■ 文哉（ぶんさい）館（1965年）

2階建てで、学生食堂として1965年10月に竣工。2006年に解体。



■ 碩学（せきがく）会館竣工写真（1979年）

6階建てで、大学教員の研究棟として1979年に竣工。その後、大学院の教室などに使用。



■ 清友（せいゆう）館（1977年）

4階建てで、学生会館として1977年に竣工。現在、1階にはファミリーマートが入る。



■ 徳望（とくぼう）館（1989年）

4階建てで、国際学部発足とともに1989年に竣工。現在、グローバル・コミュニケーション学群が入る。

V-1

桜美林短大・大学・大学院
校舎・施設の変遷

発展期の短大・大学——図書館と体育館

大学の設置にあたり、1965年に文部省から、大学と短大の図書館を分けるようにとの指示を受け、学園一丸となって本集めに奔走する。安三は腹巻に10万円入れて本集めのため関西に向かい、全校の教職員・生徒・学生は家庭の蔵書を寄附し、図書ラベルまで作成をしたという逸話も伝えられている。1970年に大学のシンボルとして図書館が竣工し、「心読看読音読することを『三到』と称する」とのことから、三到図書館と命名された。

1966年9月に更賜体育館（旧体育館）が竣工し、同年11月に学園創立20周年式典をここで挙行している。その後、1973年には武道館として止戈徳館が、80年には又賜体育館（新体育館）が竣工している。

学園の体育館と図書館は、「他の何れの学園のよりも、壮大である」と誇り、「わたくしは、近来学園のキャンパスに、ステッキを曳きながら、『わがよろこび、わがのぞみ』と口ずさみざるを得ぬ」と、安三は回顧している。



■ 桜美林学園絵葉書 三到図書館（1970年6月）
建設当初は、大学の入学案内の表紙や絵はがきに使用された。



■ 図書館内部（1987年）
図書館は6階建てで、約2,500㎡の面積がある。



■ 本部棟竣工（1971年3月）
図書館の並びに建設され、後にメディアセンターとしても使用された。



■ 更賜体育館竣工（1966年9月）
鉄骨平屋建てで、創立20周年に建設され、記念式典が挙行された。



■ 止戈徳館竣工（1974年3月）
更賜体育館の並びに建設された、3階建ての武道場である。



■ 又賜体育館竣工（1980年12月）
鉄骨3階建てで、床暖房用のソーラーシステムが導入された。

V-1

桜美林短大・大学・大学院
校舎・施設の変遷

新キャンパスの建設——大学院のキャンパス整備

大学院は、1993年の国際学研究科の設置から始まった。大学院ではその後、2001年に社会人が通いやすいキャンパスとして、新宿駅近くに新宿サテライト教室（大学院新宿キャンパス）を設けている。その後、2008年に、四ツ谷駅近くに四谷キャンパスが開設され、老年学研究科、大学アドミニストレーション研究科、国際学研究科言語教育専攻等の授業が開始された。新宿サテライト教室は、大学院が四谷キャンパスで本格稼働したことに伴い、2010年に閉鎖された。

しかし、四谷キャンパスも地域の再開発事業に伴う取り壊しにより、2015年9月に千駄ヶ谷駅近くへ移転し、現在、大学院は、千駄ヶ谷キャンパスに設置されている。社会人も通いやすい都心のキャンパスとして、国際学研究科グローバルコミュニケーション実践研究学位プログラム、大学アドミニストレーション実践研究学位プログラム（通信教育課程）、老年学学位プログラムの授業や、公開講座を開講している。また、経営学学位プログラムは、2019年から新宿区百人町の新宿キャンパスにて授業を実施している。



■ 新宿サテライト教室（大学院新宿キャンパス）外観（2002年）
新宿駅近くにある民間ビルの1フロアに開設された。



■ 新宿サテライト教室（久保ビル）入口（2002年）
2001年から10年まで大学院の教室が置かれた。



■ 竣工直前の四谷キャンパス（2008年3月）
四ツ谷駅近くに、地上5階、地下1階建ての校舎が建設された。



■ 四谷キャンパスの看板（2008年）
四ツ谷駅近くに掲げられた看板。



■ 大学院千駄ヶ谷キャンパス外観（2015年）
地上3階、地下1階建ての現在の大学院キャンパス。



■ 千駄ヶ谷キャンパス図書室（2015年）
大学院生用の図書室。移動書架が備えられている。



■ 新宿キャンパス（百人町）外観（2019年）
経営学研究科が入る、5階建ての新宿キャンパス。



■ 新宿キャンパス（百人町）ナレッジクラウド（2019年）
新宿キャンパスには、電子図書館が整備されている。

V-1

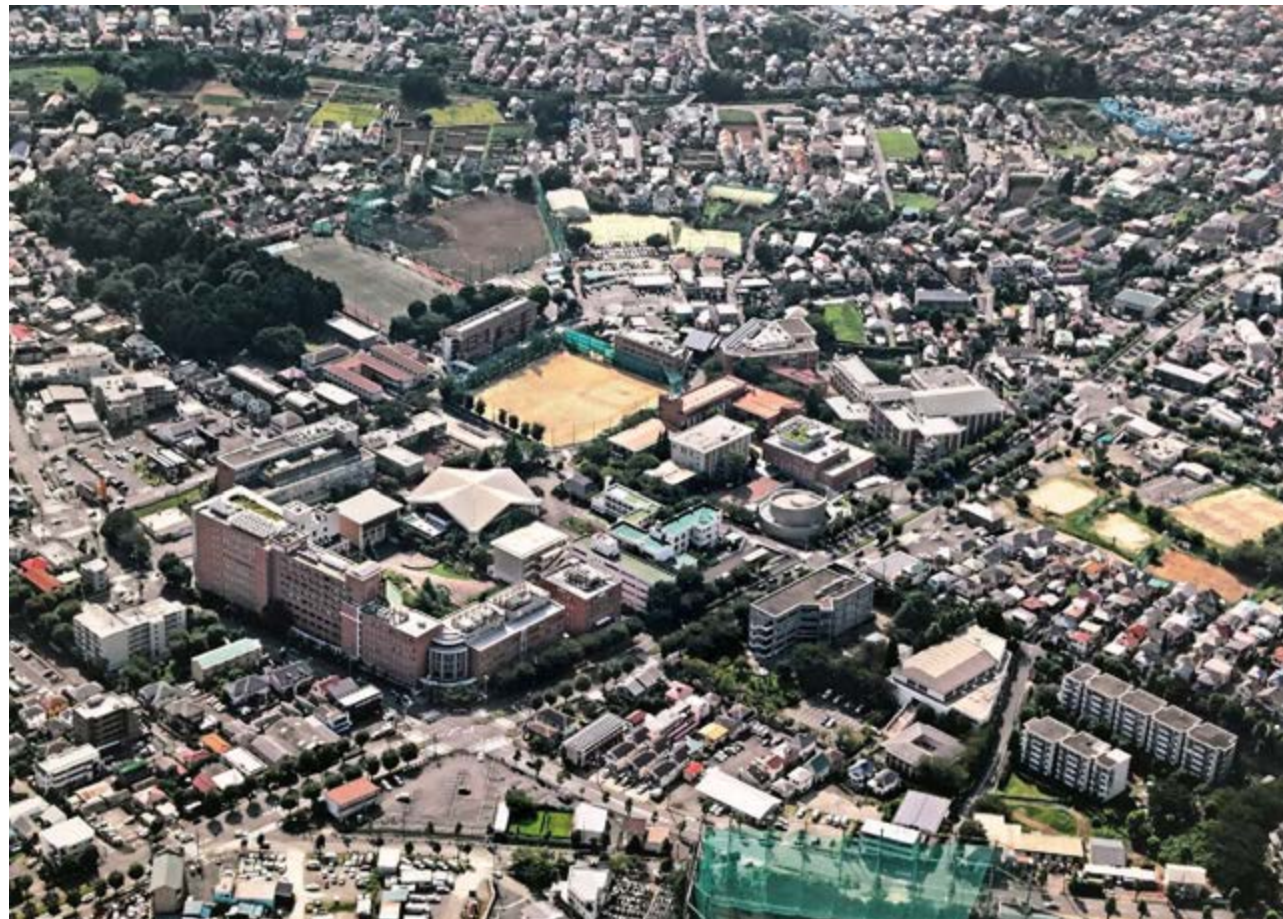
桜美林短大・大学・大学院
校舎・施設の変遷

新キャンパスの建設——町田キャンパスの再整備

1981年に、^{けやき}櫂の広場が完成した。その後、この広場を取り囲む形で、一粒社ヴォーリス建築事務所の設計による、レンガ調の大学新校舎が次々と建設されていった。

櫂の広場エリアで最初に建設されたのは^{たいへい}太平館で、パソコンを整備したセルフアクセスセンターを含む教室棟として1994年に竣工した。また、学園本部棟として2000年に^{えいこう}栄光館が竣工している。その後、町田キャンパスでは、学園当初の建物の名称を引き継ぐ新しい教室棟が次々と建設され、2002年には大学教員の研究棟として崇貞館、06年にはリベラルアーツ学群の教室棟として明々館が竣工した。

また、2004年にインフォメーションセンター・保健室棟として^{いちりゅう}一粒館、07年に語学教育の拠点として学而館が竣工した。さらに、2008年に新たなチャペルとして荊冠堂が献堂され、同年隣接して理系教育の拠点として理化学館が竣工している。



■ 桜美林学園全景航空写真（2017年9月10日）

手前が大学エリアで、後方が中高エリアとなる。周辺は住宅街となっている。



■ 崇貞館と太平館（2020年）

左端は栄光館、その奥のL字型の建物が崇貞館、正面右手が太平館。



■ 一粒館（2020年）

インフォメーションセンターの入る一粒館。左奥が保健室棟となっている。



■ 学而館（2007年）

地上4階建てで、町田街道側に「学而事人」の文字が掲げられている。



■ 明々館（2006年）

地上9階、地下1階の教室棟で、1万㎡を超える床面積がある。



■ 荊冠堂（2008年）

新チャペルとして建設され、円形の外観が特徴的である。



■ 荊冠堂のパイプオルガン（2008年）

2階部分に大型のパイプオルガンが設置されている。



■ 理化学館（2008年）

数学・物理・科学・生物等の理系の研究室と教室が設けられている。

V-1

桜美林短大・大学・大学院
校舎・施設の変遷

新キャンパスの建設——PFCと多摩アカデミーヒルズ

2003年に、JR横浜線淵野辺駅北口にPFC（プラネット淵野辺キャンパス）が完成した。駅舎とペディストリアンデッキでつながるバス乗り場も整備され、スクールバスの発着場となっている。当初、日本言語文化学院（留学生別科）の拠点として活用、2008年からはビジネスマネジメント学群に追加設置されたフライト・オペレーションコースの拠点となり、その後16年に発足したグローバル・コミュニケーション学群の校舎としても21年3月末まで使用された。演劇ホールとして、プルヌスホールが設置され、学生たちの公演発表の場ともなっている。

2010年に大学施設として運用を開始した多摩アカデミーヒルズは、ウェルサンピア多摩という保養施設を転用したものである。当初は大学研修施設として活用していたが、2016年にフライト・オペレーションコースがPFCから移転し、現在は20年に発足した航空・マネジメント学群の国内拠点となり、23年の完成に向けて新棟も建設されている。ここには、専門性を身につけるためにFTD（飛行訓練装置）やプロトージャートレーナーを完備し、操縦の訓練や整備管理業務・航空管制の授業の一環として、さまざまなシチュエーションの対応法を学ぶことができる設備がなされている。



■ PFC 外観（2003 年）
横浜線線路沿いに建設された、地上4階、地下1階の建物で、約9,000㎡ある。



■ PFC 竣工（2003 年）
淵野辺駅北口に直結したキャンパスで、スクールバス乗り場が整備された。



■ PFC 内のプルヌスホール（2003 年）
演劇用ホールとして整備された施設で、学生たちの公演会場となっている。



■ PFC と桜美林橋（2003 年）
駅のペディストリアンデッキとPFCを繋ぐ桜美林橋が架けられている。



■ 多摩キャンパス外観（2021 年）
地上8階、地下1階建てで、多摩市の多摩中央公園に隣接して設置されている。



■ 多摩キャンパス内の飛行訓練装置（2021 年）
飛行訓練用のFTD（飛行訓練装置）が設備されている。



■ 多摩キャンパス新棟完成予想図（2021 年）
2021年9月に起工した多摩キャンパス新棟。2023年4月供用開始。

V-1

桜美林短大・大学・大学院
校舎・施設の変遷

新キャンパスの建設——新宿・東京ひなたやまキャンパスの整備

学生定員の増加とともにキャンパスの分散化が進められ、2019年には、新宿区百人町に新宿キャンパスを開設し、ビジネスマネジメント学群と大学院経営学学位プログラムを置いている。ここは、国立科学博物館新宿分館（研究施設）の跡地で、同研究施設のつくば移転に伴い本学が校舎を新設し、移転した。学生が主体となって運営するカフェや食堂、イベントや展示会を企画・開催できるスペースをはじめ、企業と連携した実践的教育を強化した新しいキャンパスとなっている。また、本格的な電子図書館の整備など、新しい試みも進めている。都心立地を活かし、ビジネスの最先端を学び実践するキャンパスである。

2020年には、町田市本町田に東京ひなたやまキャンパスを開設し、芸術文化学群を置いている。ここは、市立本町田中学校と本町田西小学校の跡地を活用したもので、教室棟、スタジオ棟、音楽棟、アトリエ棟など、用途に合わせた建物で構成され、2022年には、芸術文化ホールが整備された。近隣地域と共生しながら、芸術創造や交流、発信の拠点を目指しているキャンパスである。



■ 新宿キャンパス(百人町)外観(2019年)
大久保駅・新大久保駅の近くに立地するこの創新館は、5階建て約1万6,500㎡の建物である。キャンパス各所が実践的な学びの場となっている。



■ 新宿キャンパス・ゼミラボ (2019年)
研究室と学生の学習スペースとの間は可動パーティションで、自由度の高い学び空間となっている。



■ 新宿キャンパス・カフェ・エデュティアント (2019年)
カフェテリア（食堂）の運営についても、学生が実習としてデータを分析し、改善案を定め、運営に活かしている。



■ 芸術文化学群「桜美芸」ロゴ (2020年)
東京ひなたやまキャンパスのPR用に制作された「桜美芸」ロゴマーク。



■ 東京ひなたやまキャンパス・演劇実習室 (2020年)
集中的に稽古を行うための演劇用実習室。近代劇・現代劇・朗読劇などの授業で使用している。



■ 東京ひなたやまキャンパス・MAルーム (2020年)
セリフ編集、整音、アフレコ、ラジオドラマの収録など幅広い用途に対応している。



■ 東京ひなたやまキャンパス外観 (2020年)
約1.66haの敷地に建つこの啖啄（そったく）館は、3階建て約1万8,600㎡の建物である。

V-1

桜美林短大・大学・大学院
校舎・施設の変遷

諸施設の整備

学外に整備された初の施設は、1969年に開設された伊豆桜美林セミナーハウス（片瀬桜美林ハウス、東伊豆町）である。1974年には、長野県小諸市に浅間山荘（小諸山荘）も開設され、ゼミ合宿等に利用された。その後、桜美林ハウスに代わり2004年に、伊豆高原桜美林クラブ（伊東市）が開設された。また、2016年には、長野県北安曇郡に白馬シーズンスポーツキャンパスが開設されている。

学外の寮としては、2009年にフライト・オペレーションコースの学生向けに^{そったく}啫喱寮が設置され、現在は特別強化クラブのための寮として使用されている。2010年には淵野辺駅北口に外国人留学生等が利用する国際寮（PFC II）、13年には同南口に第二国際寮（PFC III）が建設された。

学内の大学部活動施設としては、1999年にクラブハウスの黎明館と合宿施設の同志館が竣工し、隣接して桜グラウンドも備えている。近隣の町田市上小山田には、2009年に大学野球部のクラブハウスが設置され、16年に再整備、18年に室内練習場が整備された。



■ 伊豆桜美林セミナーハウス（片瀬桜美林ハウス、1969年）
4階建ての宿泊施設で、ゼミ合宿や教職員研修会などに利用され、1999年に廃止された。



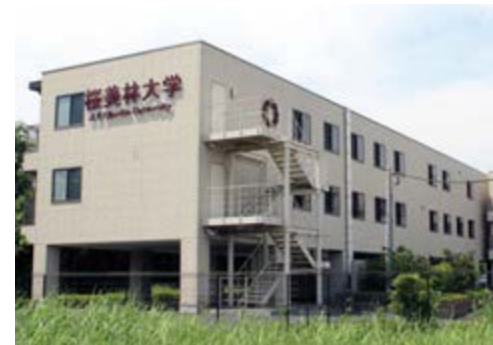
■ 浅間山荘（小諸山荘、1974年）
木造2階建ての宿泊施設で、ゼミ合宿や教職員研修会などに利用され、2008年に廃止された。



■ 国際寮（PFC II）外観（2010年）
ワンルームタイプ定員245名の横浜線線路沿いにある9階建て施設で、1階に保育園が併設されている。



■ 第二国際寮（PFC III）外観（2013年）
ワンルームタイプ定員84名の7階建て施設で、淵野辺駅南口にある。



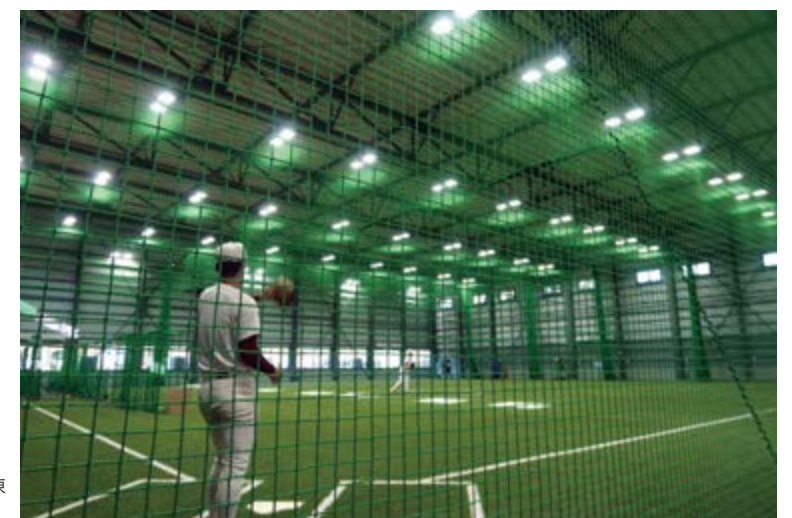
■ 啫喱寮外観（2009年）
木造の境川研修所を2008年に取り壊して建設された。淵野辺駅と大学の中間の境川近くに所在する。



■ 啫喱寮食堂（2009年）
ワンルームタイプ定員60名で、現在はアスリート寮として学生が共同生活をしている。



■ 白馬シーズンスポーツキャンパス（2016年）
長野県に設置された、実習・演習・研修の場として利用されている4階建て施設である。



■ 大学野球部室内練習場（2018年）
大学北方の上小山田地区にある室内練習場で、約1,900㎡ある。